

序章
袋小路

隠された夢を叶えようとしている

人形使いに支えられた首

幸せな笑みを浮かべる

私が覗いている

それにしても寒い。身体の芯から冷えていくようだ。からっ風が時折吹き付けてきて、私の頬を容赦なく刺す。暗くなるにつれて、不安感は増大の一途を辿り、心細さに拍車をかける。

ここは、路線バスが一時間に一本通るかどうかという場所にある緑地公園、その一角。

私はベンチに腰掛ける事を強いられ、手足はしつかりと縛られている。両足が大腿を開いた状態でベンチの脚に固定されており、身を振ってもびくともしない。

このような姿勢で拘束されてから、一体どれほどの時間が経過したのだろう。

制服姿なので、見る人が見るとこの生徒かという事がすぐに分かかってしまう。尽星女学園の生徒がベンチに一人で縛り付けられて放置されていた、などという噂が流れてしまったらどうしよう。またそれをネタにして弄られてしまう。クラスメイトの笑い声が耳の中でこだまするようだ。

濡れたスカートが脚に絡まって気持ち悪いし、冷たい下着は肌に纏わりついて私の体温を奪っていく。雲一つ無い蒼穹には無数の星がきらきらと散らばっていて、驟雨が降るような天候ではなく、スカートを濡らす要因は、傍目からは見当たらないかも知れない。

私はすでに一度粗相をしてしまっている。屈辱のだけど、身動きの取れない状態、しかもこんなに股を広げた格好では、出口、つまり括約筋を締めようとしても力が入らない。

ベンチに縛り付けられる前に、ペットボトルの水を二本分も一気に飲む事を強要されて、それが尿となって排出され、身体を汚しているのだ。溢れ出たおしっこは、下着、次いでスカートを汚し、ベンチに水たまりを作ったかと思うと、湛えきれない分が足元へと流れ落ち、またふくらはぎを伝っていった。地面が変色しているのはその名残だ。

出したてのおしっこの臭いは時間の経過と共に変質し、つんとしたアンモニアの放つ刺激臭に代わりつつあり、私は否が応でもその変化を感じ取る自分の鼻を恨んだ。またその臭いは、自分が放置プレイに供されている恥ずかしさを増幅しているようで、私は居たたまれなくなつて、ずっと俯いていた。

私の中に挿入され、抜け落ちないように下着で固定されているバイブレーターは、先程まで振動を続けていたが、電池の充電が切れたようで、今は鳴りを潜めている。誰に見られてしまうとも分からない状況であるにも関わらず、私の身体はバイブの振動に翻弄されて、心とは裏腹に感じさせられてしまっていた。こんな辱めに遭っているのに、敏感になつている私の陰部は熱く滾つていて、屈辱感と快楽との間ぎ合いが、私の精神を苛んだ。

バイブの電池が切れて我に戻った時、例えばそれが崩壊間際だとしても、私にもまだ自尊心はあるのだ。そうぼんやりと思つた。

近くには街灯が設置されていて、ベンチを背後から明るく照らしている。

ちようどスポットライトが当てられているような感じがして、それが深い夜の闇と、煌々と照らし出された私の白く露出された太腿とのコントラストを成しているようで、確にされた哀れな見世物を

彷彿とさせる。

公園は僻地にあるとは言つても、公共の施設なので、人が全くいないという訳ではなく、空いているスポットで二人語らいたいと思ひ訪れるカップルや、ペットの散歩をさせている老人、それに、家に真つ直ぐ帰るのが名残惜しいのか、ジュースの自動販売機で買った飲み物を片手に、雑談に花を咲かせている高校生グループがいたりもした。

遠目から見た所制服は違うが、私と同じ年頃の女の子達が、自転車から降りてひそひそ話をしている様子も見て取れた。

私が座っている——と表現する事を許されるのなら、であるが——ベンチは、園内の幅の広いメインの遊歩道からはちよつと離れた所に設置されていたため、実際に衆目に晒されている訳ではなかったが、こちら側からは遊歩道を通行する人が見えるので、万が一気づかれれば、あちら側からも当然、私を見つける事ができる道理だ。

明らかに異常な体勢でベンチに括り付けられている事に、もし気づかれたら。自分の目の前を不意に通るかかかっている人があるとしたら。

極限まで高まった羞恥心から、自意識が過敏になっている私は、周りの人間が、実際はチラチラとこちらを見てはコンコンと話をし、時には笑っているようにすら感じた。そんな仮定を自分で考えておいて、自ら不安を煽り、怖くて顔を上げられない。

ひとときわ強く冷たい風が吹き付けける。私はあまりの寒さに、身体をブルつと反射的に震わせる。

と同時に、ついさつき止むに止まらず放出したはずなのに、再び強い尿意を感じ始めてしまった。

最初の、拘束されてから一回目の粗相までは、絶対に漏らすまい、人前でそんな辱めに遭う事なんて考えられないと思つていた。決壊の憂き目に遭う前に、心配しなくても縛めは解かれるから、大丈夫。そう思つていた。だからこそ、最終的な結果としては惨めにおしつこを漏らすことになつてしまつたが、本当の限界まで耐える事ができたのではないかと思う。

でも今は違う。何時間もの間、私はそこに放置されていたし、寒さ故に、括約筋に力を入れて締め付けているかどうか、自信が持てない。果たしてこれで、この感じで堰き止めている事になるのか……？ 出口の感覚が麻痺してしまつて分からなくなつていなのだ。

一度限界我慢からの決壊を体験した後、次に来る尿意は間隔が短く、我慢が全然効かない事は経験から知つていいる。例え、つい先ほど一滴残らず体外に排泄できたと感じられたとしても、膀胱は一度の放尿では収縮しきつておらず、まだたつぷりと湛えられた残尿を、一刻も早く出そうとしてくる。

何時まで待つても、自分をこういう目に合わせた人間は戻つてこないという、絶望や諦めの気持ちと、さつさと放出して楽になりたいたいという生理的欲求が私の脳内でドロドロに溶け合う。

だめ。最期まで諦めちゃだめだよ！ 頑張つて！ 助けはくるから。と、根拠のない考えを作り上げ、それに縋ろうとする天使。

もう一回出しちゃつたものね。いいよ、楽になるろう？ またあの開放感と、ほんの一瞬の、そう、刹那の気持ちよさがあればいいから、温もりに浸ろう。と、欲望に忠実たれと囁く悪魔。

だめ、出口を締めてはいられない……。堰き止められているのか全く分からな……。あつ……。

漏れちやいそう……。ああっ……。もうだめ……。

……だすね？　だつてもう仕方ないよ……。無理だから……。

「だめえっ、あつ……。はっああああああつ……。……」

コップにいっぱいの水が、表面張力で辛うじて保たれていたパランスを崩して、遂には溢れ出すように。

じわりじわりと下着に湿り気を与えていたものが、勢いをつけて出口に殺到し、いともたやすく最後の関門を突破していく。

冷え切った身体が一時の温もりを感じ、同時に力が抜けていく。また出てしまっているよお……。

お尻が……。温かい……。

私は括約筋を完全に弛緩させてしまい、膀胱が収縮し送り出してくる尿をそのまま無抵抗に、外へと誘い続けた——

温かい尿は、白い息を吐き出しながら、私の身体を伝い、流れ落ちていった。雨水が溜まらないように設計されたベンチは、その機能を活かし、座板の隙間からびちゃびちゃと水滴を垂らした。

私は、シーンと冷え切った寒空の下、両手両足を拘束され、誰にも戒めを解いてもらえず、生理現象という抵抗の出来ない欲求を満たし切ってしまった。

どうして。どうしてこんな目に私は遭わなくてはいけないの。情けない。もう死んでしまいたい。それなのに気持ちいいと思ってしまう自分。仕方なかった事なのだから、と、自分を慰める気持ち。

それらがぼんやりとした、思考し続けようとする事を放棄した脳内で混ぜ合わさる。

私、おしっこをする大義名分が欲しかっただけなのかな——

* * *

——私は見慣れた景色の中にいた。景色というか、それは天井。この天井は……。我が家の天井？

夢、か……。

私は、自分自身が発していたと思われるうなざれ声が耳に入り、目を覚ましたようだ。

何故だろう。身体がとても重い。それに寒い。いや、空気が寒いのではなく、身体が冷たい、そんな気がする。特に手足の末端が凍てつくようで、神経が通っていないのでは、と思うくらいに感覚が覚えぬ。

私は、長い溜息をつく。いつも見る夢。何度見ても見慣れるという事はなく、夜な夜な私を苦しめてくる。

あれだけリアルに感じていた尿意、それに放尿の感覚はなんだつたのだろう？　本当におしっこを出している独特の感触、膀胱が収縮していく感じが手に取るようにわかったのだけれど……。

まさか今日も——と思ったところで、腰とお尻、背中にかけて、ヒヤリと冷たいものを感じる。反射的に指で湿り気を感じる場所に触れ、鼻の付近に持つて行き、匂いを確かめる。はっきりとしたおしっこ匂いがする。おねしょをってしまったようだ。

私にとって、それは稀にやらかしてしまう事故ではなく、頻繁に体験させられるものだから、衝撃自体は少ない。勿論、全くショックが無い訳ではないけれど、悪い意味で慣れてしまっている。

背中までぐっしりと濡れているという事は、寝ている間に漏らしたのは一度だけではなく、複数回だったのかも知れない。夢の中

での体験と同じ回数だとすると、二回？ だろろうか……。

枕元に置いてあるスマホに手を伸ばし、今が何時なのかを確認する。まだ起床するためにアラーム設定した時間にはなっていない。けれど、軽くシャワーを浴びて身体を洗い、尿で汚れてしまったシートを処理しなければならぬ。

週に二、三回はやっていることなので、泣き出してしまおう、などという事はないけれど、疲れてしまおう事には変わりない。

結構な頻度で失敗してしまおうため、シートは防水加工の施された、おねしょ用の物を使っている。そのため敷布団は濡れる事を免れた。幾度となくおしっこで汚しているから、シートには黄ばみは何箇所にもついでいて、仄かなおしっこの匂いもする。もう洗ってもそれは落ちない。

私は何故か部屋着ではなく、学校の制服を着たまま寝てしまっていたみたいで、ぐっしょりと濡れたそれと、下着を脱ぎ下ろし、全裸になって洗濯機に放り込むと、熱いシャワーを浴びるべくお風呂場に向かう。

寒い。それに足下がおぼつかない。それに、目眩でふらふらする。壁伝いにゆっくりと、足下に気をつけて歩かなければ、転んでしまおう。

しばらくの時間、暖を取るために、何もせずに私はシャワーに打たれ続けた。手足の末梢の冷えも少しはなくなっただろろうか。

体の汚れを落とし、温まったところで、お風呂を上がり、部屋着のスウェットを着る。

次はシートの処理だ。

私はシートのおしっこで汚れた部分に、水で溶いたクエン酸をス

プレーし、ぬるま湯をかけ、アンモニア成分を中和させる。

おしっこの成分は高温の水をかけると変質してしまい、シートにこびりついて取れなくなってしまうので、体温程度のお湯を使うのがポイントだ。それが終わったら、乾いたタオルで叩きながらシートに含まれている水分を吸収させる。あとは天日で乾くまで干せばいいのだけど、今日は生憎の天気。

はあ……。また溜息。

その時、スマホが起床時刻に設定したアラームを鳴らす。学校に行く準備をしなければならぬ。

シートはとりあえず部屋干ししておいて、帰ってきたらドライヤーを使うなり、コインランドリーの乾燥機を使って乾かそう。

やれやれ、私はおねしょの処理に、限られた人生の時間の何パーセントを費やしているのだろう……。

一時期、防水シートを使わずに介護などに使われる大人用のおむつを穿いて寝ていた時期があったのだけど、それはやめてしまった。

おむつは燃えるゴミとして決められた曜日にゴミ置き場まで持っていくのだけど、普通の燃えるゴミを入れた袋に比べて明らかに重し、すぐにおむつを入れたものだという事が分かってしまうのではないかと思ってしまう。

挙げ句、ゴミ置き場を持っていた時に隣人と鉢合わせになると、自分がこの歳になってもおむつが取れない子だという事がバレてしまうんじゃないかと勘ぐってしまうのだ。

それにおむつに頼りっぱなしだと、おしっこを我慢せずに出してしまう事が癖になって、おねしょが治らない身体になってしまうのではないか、という危惧もあった。

だから、面倒だけど仕方ないという気持ちでシーツを洗う日々を私は選択したのだ。

中学生になって不登校になった時期と、夜尿症になってしまった時期が重なるので、原因は、学校での様々ないやがらせや、いじめを受けてきた事によるストレスなのかなと思っている。

私はトースターで食パンを焼きながら、電気ケトルでお湯を沸かす。食欲はないけれど、何か口にしないとい。

気が進まない中、食事の準備をしながら、学校へ通うべく、制服に着替えようとする。

しかし、洗濯機に放り込んだ制服しか、今は手元にはないのだった。もう一着はクリーニング店に出している事を思い出した。早朝のこんな時間に引き取りさせてもらえる訳もなく。

クリーニング店は、仕事や学校で着る制服やスーツなども取り扱っているから、朝の七時頃からオープンしていたりもするけれど、引き取ってきては学校の始業時間に間に合わない。

第一、出したばかりなので、仕上がりもいいないだろうし……。公園から帰ったらすぐに洗わないといけない、と夢の中で考えていた、おしっこで汚してしまったスカートは、現実世界でもおねしょによってぐしょ濡れになっていて、異様なアンモニア臭まで放っている。

しかしどうやら、おしっこで汚れてしまったスカートを穿いて学校に行かなくてはならないようだ。

私は、一度は洗濯機に放り込んだ制服のスカートを取り出して、ドライヤーを使って、それを乾かし始めた。ドライヤーの熱風をスカートの至近で当てて、一刻も早く乾きますようにと願いながら。

スカートを乾かしながら、ふと床に目を落とすと、赤い液体が点々と、乾いてこびりついているのを見つけた。それは点々と、絵の具を垂らしたように、あちこちに見られた。

一旦ドライヤーを切って、床に付いた赤い汚れを追って歩いていくと、ポリバケツがその先にあつた。中を見ると、これにもまた、赤い液体が入っている。

それを見て、昨日自分が何をしていたかを思い出す事になった。

昨日私は学校で発作を起こしてしまい、早退したのだった。私が起こしたのはパニック発作と言ひ、過呼吸や動悸、吐き気などの症状を引き起こし、文字通りパニック状態に陥る。

自宅まで車で送ってくれたの、保健室の先生だったかな。

その時の私は、情緒が著しく不安定になっていて、いつも発作を起こした時に飲む頓服薬を使っても状態は好転しなくて、落ち着きを取り戻すために瀉血行為をしたのだった。

瀉血というのは、体内を流れている血を抜く事で毒素を体外に出し、症状を治療する、というのが本来の意味だけれど、血を抜く行為そのものを指す事が多い。いわゆるリストカットなどと同列に扱われる、自傷行為のうちの一つだ。

私は部屋着に着替える余裕すらなく、制服姿のまま、病院での採血の時に用いられる、翼状針と呼ばれる物を腕に刺し、血がチューブの中を流れ、用意したバケツにピチャピチャと滴となって落ちていく様を、ぼんやりと眺めていた。

どういふ仕組みでそうなるのか分からないけれど、とにかく血を見るが気持ちが和らぐのだ。

血が身体から抜けていくに従って、私は精神的には落ち着きを取

り戻していったが、元々貧血持ちのところに血を抜くという行為をしたため、思うように身体が動かせなくなっていた。手足が冷たく、しびれていく……。

その時、完全に忘れ去られていた生理的欲求の一つ、尿意が鎌首をもたげてきてしまったのだ。膀胱が強い力で収縮しようとしており、私は今来ている大波をなんとかやり過ごせないか、身体を前後に揺らしながら、出口に力を込めていた。

下腹部が重く張っている感じがして、キュウウ……と縮もうとしているのが分かった。

気づいた時には既に限界だった。満足に手足を動かすことも叶わなかったため、我慢に適した姿勢を取って抵抗することもできず、あひる座りのまま、万事これまで、といった体で、私はおしっこを漏らし始めた。

「あああ………」

だらしなく出口を弛緩させた状態で、ただ呆然と、放尿しているという感覚。

下着、そしてお尻……それから太ももを、生ぬるい液体が浸してゆく

あつたかいな……。

どこか他人事のように、おしっこを垂れ流している自分を俯瞰しているように感じられた。

いけない事をしている、そんな意識すら持てなかった。

私は、おしっこを出したくなった身体が、勝手に欲求を満たしている、その結果を開放感として、ひとときのぬくもりとして、フィードバックされてくるのを、ぼんやりと受け止めていたように思う。

しばらくおしっこの水たまりができた床に座ったまま、放心状態だった事まではなんとか思い出せた。

昨夜、制服を着たままお漏らしをしまい、その制服のまま床に就き、更に眠っている時におねしょまでしていた事になる。

しかし、いつの間床に就いたのか、そのあたりの記憶が完全に脱落している。

妹が私を介抱してくれたのだろうか。

「……真央？」

蚊の鳴くような声で、眩くように妹を呼んでみる。が、返事はない。

「真央？ まだいる？」

声を若干張りあげて呼んだが、静寂が返ってくるだけ……。

妹は、私よりも早く起き出し、登校するのが常で、今日とて例外ではなかったようだ。

そういえば、キッチンのカウンターにメモがあつた気がする。確認すると、妹の筆跡で、「無理はしないで。しんどかったら休みなよ？」と書かれていた。

一応乾燥させたスカートと鼻にあてる。アンモニアの強い刺激臭は消えたけれど、独特な乾燥したおしっこの臭いは消えず、鼻腔を刺激してくる。

でも学校には行かなくちゃ……。

異臭を他人に気づかれる事に対する羞恥心は、もちろん強くあつた。

でも、私は夜尿症だから、匂いがしてしまうのは仕方がない。嗅ぎなければ嗅げばいい。罵りなければ罵ればいい。

そう心の中で自分に言い聞かせると、何故だか鼓動が早くなるのだった。

電車にはいつもの時間に間に合い、比較的空いている時間帯だったので、満員電車に乗り込んでしまい、私の発する悪臭について、周囲の乗客が、「なんか匂う……」だとか、「なにこの臭い気持ち悪いね」といったヒソヒソ話をする、というような事態は招かなかつた。

特段変な事を言われたりしなくて済んだ私は、学校の最寄り駅で電車を降り、学校へ向かう。

徒歩数分で見えてくる校門。
私は校内に入る前に、病院で渡された安定剤を一錠、折りながら口の中で溶かす。毎日の登校前のおまじないの頓服だ。今日は何も起きませんように。

なんとか心を落ち着けて学校に入る。
自分の下駄箱を開ける。汚物などの変なものは何も入っていない。上履きの中に手を入れてみる。画鋲などが仕組まれている、という事もなかった。

無意識にやっつてしまふ、中学生の頃からの朝の確認作業。
終始俯いて廊下を歩き、私の教室である保健室に着いた。

「おはよう……ご早いです」

私は入り口のドアを開け、保健室の養護教諭である桑田先生に朝の挨拶をする。

「あ！ 佐伯さんおはよう。暇かもしれないけど今日もよろしくね」

あっさりとした明るい声で挨拶が返ってくる。こういう時はサブバした性格の先生に居てもらえると落ち着く。

よかつた。桑田先生、今日はお休みじゃなかつた。

我が校では、養護教諭が学校を休む場合は、保健室には鍵がかけられて、入室できない決まりになっているからだ。

保健室で過ごす事ができない場合は、他に部屋が用意されている訳ではなく、元々自分が所属している教室にいかなくてはならない。自分の纏っている臭いが皆にばれてしまう危機は去つたようだった。

体調不良の生徒が多く来室した場合も、保健室から出る事を命じられることがあるけれど、ここ数日風邪が流行っているという事もなく、落ち着いて過ごすことができそうだ。

先生は、竹を割つたような性分というのと、立ち入った話をせず、私との距離感をほどよく保ってくれる。保健室は、居づらい学校の中のセーフティゾーンを提供してくれているという思いを私に抱かせ、私が安らぐ事のできる数少ない場所なのだ。

私の漂わせている臭いについても、先生は知らないふりをしてくれているのかもしれない。

『キーンコーンコーン』

やがて授業開始のチャイムが鳴る。

今日は、保健室登校の生徒は私だけのようだった。

私は最近読んでいる本を鞆から取り出し、続きから読み始めた。

『〇嬢の物語』という小説だ。

万が一誰かに見られると不味いと思つたのでブックカバーでしっかりと表紙を隠してある。表紙に描かれている乳房の膨らみと形の良い突起、それを摘んでいる指……。挑発的な表紙だと思ふ。

あえてカバーを外して読むのも、刺激的かも知れない。そんな勇氣はないけれど。

あらずじについて簡単に説明すると、ファッション写真家のOは、恋人のルネにある城に連れられて行き、そこにいた男たちの共有の玩具となるように、鞭で打たれるなど、肉体を蹂躪する手段で調教される、という内容。

結構先まで読み進めていて、もう少しで読み終わるかという所なのだが、Oの陰部に鉄の輪を通すという描写があり、私はネットで、性器にピアスを装着した外国の女性の写真を、ときどきしながら見ていた事を思い出して、二〇世紀半ばに、すでにこのような描写が克明に書かれている本が発行されていた事に驚いた。

割礼などにも見られるように、歴史のある儀式的な行為なのかもしれないけれど、高校生の私にはショックを与えるのに十分な表現だった。

誰かの所有物になる証、誰かとの契約の証として、普段人に見られる事のない場所へピアスを装着する事。

痛みを通じ絆を深める行為に、私は並々ならぬ興味を抱いた。

私は先生に体調不良を訴え、カーテンで仕切られたベッドで休む許可をもらった。

事実、昨日の瀉血の影響から血圧は上がらないし、体調はすこぶる悪かった。

しかし、ベッドを借りた理由は嘘……。

本当の理由は、読んでいた本の、鉄の輪を陰部に装着させられるシーン……、それが頭の中でこだまして止む気配がなく、火照ってしまった身体をどうにかして慰めたい、というものだった。

文字を追わなくてもありありと情景を思い浮かべる事ができる。痛いかな……ピアスを入れるのって……。

すぐときどきしちゃう……。誰かの所有物になる事で、従順なペットになることで、今まで遭ってきた苦しい事から開放されるのかな。新しい世界で私、幸せになれるのかな。

気持ちのいい事してもらおう期待で、いつもあそこを濡らして準備できている、そんなベットになりたい……。

秘所は、もう蜜が溢れていて、下着をグショグショに濡らしてしまっていたので、自慰でもしない事には落ち着く事などできそうになかった。ここが学校だという事、すぐ近くに人がいること……、そんなのは些細な問題ではない。火照って切なすぎるあそこ、固く充血したクリトリス、今からお布団の中でたつぷりと、弄ってあげるからね……。

椅子を立ち上がり、太ももの内側が粘つくのを意識しながら、両脚を擦り合わせつつ、ゆっくりと歩き、ベッドへと近づく。

ちらつと後ろを振り返ると、何やら書類に目を落として没頭しているような、先生の姿が目映った。

衝動的に、今ここで触れてみたい、という思いが湧き上がってきた。

カーテンの向こうに行つて、思うがまま、気持ちのいい事に没頭したいと逸る心を宥め、先生に背を向けて、スカートの中に手をサツと差し入れる。そして、あたたかい愛液で粘っていた股間を指で確

かめてみる。

プチュツ…………。

クチョ…………クチ…………クチャア…………。

自分の身体が発する卑猥な水音にびっくりする。と同時に、痴態を見せびらかす快感に思いを馳せる。どうなってもいい、見て。私のいやらしい所を。と心の中で思いながら、グチョグチョと中をかき混ぜる露出狂の気持ちでどんなだろう…………。

今朝見た夢では、人に痴態を見られる事が恐ろしく、あんなに惨めな思いをしていたのに、全く反対の事を考えていた。

嫌だ、こんな目に遭わされて、消えてしまいたい…………そう思う気持ちに押しつぶされる前に、脳が壊れてしまう前に、逆転の発想をするよう、促されているのかも知れなかった。

羞恥心を超えた向こう側には、もういい、見られてしまっても、と開き直る境地があるのではないか、そう思った。

はじらいの心と表裏一体の快樂…………それは味わってはならない禁断の果実なのかもしれないが、片足を踏み入れてしまった事で、惘然たる思いに苛まれてきた日々から解放される、そんな気もした。

「…………あら佐伯さん？ まだそこにいたの」
スカートの中から手を戻した直後、唐突に背後から声が掛けられ、ビクンと身体を弓反らせてしまう。

…………大丈夫、先生は書類に目を落としたまま。

「あっ…………、た、立ちくらみがちよっ」と

私の咄嗟の言い訳を聞いて真に受けた先生は、立ち上がってこちらに歩いてきた。

「大丈夫…………？ 手、貸してあげようか。ほら、早く横におなりな

れ」

「へ、平気ですから…………。あっ…………」

先生と繋いだ手、濡れている方の手だった…………。

先生の手も、私の気持ちのいいぬめりで、汚しちゃった…………。

私はベッドに潜り込むや否や、温かく濡れた股間を再び弄り、湿り気を秘密の突起に十分に与え、塗り込むように刺激した。

「ひっ…………」

頭まで布団を被り、必死に声が出そうになるのを我慢していたのだけど、熱い吐息と共に声帯を震わせてしまうのを止める事ができず、一瞬漏れてしまう。

かと言って、この天にも登るようなめくるめく興奮と快感…………。

この状況で指を止められるわけがない。

も、もう少しで…………。ああ…………。

中指と薬指の腹で、強く摩擦する。

あ、きもちいつ！ もっと、ああ…………うぐう…………あ、いく。

「…………んはあっ…………いくっ」

先生とカーテン一枚隔てたベッドの中で、私は絶頂を迎えた。

掠れ声が思わず出てしまう。

私は、あつという間に真っ白な世界に持っていかれ、いつの間にか眠りに落ちていた――